

『土佐日記』

-歴史と文学のはざまで-

定員・回数：60人・3回

時間・場所：午後2:00～3:30・研修室

費用：受講料 600円

講師：斎宮歴史博物館 学芸普及課 学芸員 榎村寛之

「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり」有名な冒頭で始まる『土佐日記』は、紀貫之が書いた日本最古の日記文学であり、旅の文学です。しかし、『土佐日記』は、どういう内容なのか、本当に日記なのだろうか。誰のために書いたのだろうか。土佐はどのような国なのか。そもそもなぜ「土佐」なんだろう。知らないことがたくさんあります。歴史学の立場から作品を読んで、そんな「謎」について考えていきます。

1/19(木)	<p>『土佐日記』と土佐国、その旅のルート</p> <p>『土佐日記』に、土佐国のことは意外に書かれていません。土佐国とはどういう所で、どういうルートで旅をしたのか、五十日余りの旅で何をしていたのか。そもそもなぜ五十日もかかったのか。現地情報を交えて『土佐日記』の背景をまず知りましょう。</p>
2/9(木)	<p>『土佐日記』から読み解く平安時代の旅</p> <p>『土佐日記』の代表的なエピソードを取り上げ、主人公の見聞きしたこと、気持ちのうつろい、都への想い、そして旅の過程で関わった貴族から庶民までの人々を見て、作者・紀貫之の作品についての意識も考えます。</p>
3/9(木)	<p>『土佐日記』から読み解く10世紀の社会</p> <p>紀貫之はなぜ『土佐日記』を書いたのか。なぜ書けたのか。『古今和歌集』の撰者の彼が、なぜこの作品を残したのか。また、平安時代にはどのように扱われていたのか。各所に見られるウンチクや情報から、「歴史的文献」としての『土佐日記』の面白さについて見ていき、この作品の見方を少し変えてみましょう。</p>